

くり抜いた木枠越しに差し込む光は、ガラスの色合いを映して優しい空間を作り出します。ステンドグラスのようでありながら、温かで素朴な雰囲気の特徴です。



沖縄の光をアートに変える



お話を伺ったグラスアート藍 寿紗代さん

グラスアート藍
沖縄県名護市中山211-1
0980-53-2110



工房では琉球ガラスの体験受け入れも。豊富な色やデザインが楽しめます。

言います。琉球ガラスに誇りと自信を持ち、その未来を支える人材を育てることも、寿さんの夢のひとつです。「ガラスは柔軟性のある素材。だからこそ、新しいものを取り入れて自由にもものづくりをしたい」。もうすぐ完成する窯を使い、大型のオブジェにも挑戦していきたいと言います。ガラス職人を志す若い人たちとともに、寿さんの夢と琉球ガラスの可能性は広がるばかりです。



沖縄の未来を担う
人づくり・モノづくりを紹介します。



グラスアート藍では、年にひとつふたつ新商品の開発を目指しています。今年の夏の人気商品は、「ラグーン」。深い藍色から爽やかな水色、そして白までのグラデーションは、慶良間の海のセラマブルーをイメージして作ったそうです。



(写真右) 建築資材を開発したあと、制作するようになったお皿、万華鏡シリーズ。建築業界とガラス業界の垣根を越えるものづくりで活動の幅はさらに広がっています。(写真左) 水のゆらぎを思わせる、再生ガラスの「minamo」とサトウキビの葉をイメージした「ウージ」。どちらも昨年グッドデザイン賞を受賞した商品。規格より大きなサイズの皿もあり、料理だけでなく花を飾ったり、インテリアの用途での提案も行っています。

伝統工芸品の土産物の需要を越えて 柔軟な素材がひらく琉球ガラスの未来

[グラスアート藍]

たゆみない商品開発の努力が
ものづくりや業界の壁を越える
強い陽射しを受けて、鮮やかな色
合いに輝く琉球ガラス。沖縄の伝統工
芸品として観光客に根強い人気を誇
ります。
名護に琉球ガラスの工房を構える
グラスアート藍の代表・寿紗代さんは、
新しいデザインの商品を次々に発表
してきました。2011年には、県の
事業「工芸製品新ニーズ事業」で建築
資材・インテリアとしてのガラスを提
案。これが採択されて、ガラスタイト
ルの開発に取り組みました。フュージ
ンという技法で、複数のガラスをデザ
インして、高温で一枚に焼き直したガ
ラスタイトルは、強度があるので建築物
の外壁にも使用することができます。
これまでになかった商品に建築業界
が注目し、琉球ガラスの新しい市場の
開拓につながりました。寿さんにとっ
ても、異なる業界に目を向けたこと
で、固定観念にとらわれない自由な発
想が可能になり、土産物ではない商品
展開で、昨年は琉球ガラスで初めて、
グッドデザイン賞を受賞しました。
ガラスの作業は厳しく危険を伴う
力仕事ですが、そのような環境にも
かわららず、若い人たちが憧れて集
まってくる工房でありたいと寿さんは